

親子を対象とした食育支援活動における保育学生の意識と学びに関する研究

A Study on Early Childcare Students' Consciousness and Learning in Dietary Education Support Activities for Parents and Children

柳 瀬 慶 子

Keiko Yanase

鷲 見 裕 子

Hiroko Sumi

(要 約)

本研究は、保育学生の地域食育支援活動に関する意識・実態を把握し、親子対象の食育支援活動における保育学生の気づきから、保育学生の食育支援力を育むための視座を得ることを目的とした。

意識・実態調査から、地域食育支援活動の重要性や実施現状の周知、実践による食育支援力の養成が必要であることが明らかとなった。食育支援力養成の視座としては、親子が夢中になる内容設定、保育学生が活動内容の楽しさに浸る必要性、関係づくりのためのグループ形態の工夫という3点が明らかとなった。

(キーワード)

食育、親子支援、保育学生

1. はじめに

平成21年度施行の「保育所保育指針」では、保育所の役割が明記され、入所する子どもの保護者及び地域の子育て家庭に対する「子育て支援」が位置づけられた¹。また、平成21年度施行の「幼稚園教育要領」でも、新たに「子育ての支援」が示された²。保育者が保護者の気持ちに寄り添い家庭との連携を密にしながら、より積極的に乳幼児期の子どもの育ちを支え、保護者の養育力の向上につながる支援を行うことが必要とされている。さらに、地域の様々な人や機関などと連携を図って、地域の子育て力の向上に貢献していくことが必要とされている。この改訂により、子どもの虐待など、子どもや保護者を取り巻く様々な課題の解決を図るねらいがある。

一方、平成17年に制定された食育基本法では食育の総合的かつ計画的な推進が求められ、その目的である健全な心身の育成のためには子どもの「食」の重要性がうたわれた。これを受け、平成21年度施行の「保育所保育指針」では保育内容の改善として「健康及び安全」の中で食育の推進を掲げ³、同じく平成21年度施行の「幼稚園教育要領」では「健康」領域の中で食育が明示された⁴。このような推進施策により保育現場のみならず行政、地域において、また諸機関が連携して多彩な食育活動に取り組むことにより、子どもに対する食育は家庭に対する食育へと波及効果をもたらすことが期待できると考えられている。

保育士養成校においても子育て支援や食育実践活動が多く取り込まれている。子育て支援としては学内などでひろばを実施し、その活動に参加した学生の学びについての報告がされているが、参加学生の保育展開力の学びについて検討されているものが多い^{5・6・7・8}。本学も平成22年より地域貢献として裁

培活動を中心とした食育の取り組みを行ってきた。平成 22・23 年は、参加学生の子どもに向けた保育展開力の育成における学びが中心であり、一定の教育効果が得られた^{9・10}。筆者らは、保育学生が親子対象の食育実践活動への関心と参加意欲を高めること、さらに食育実践活動を通して、親子を対象とした食育支援力を育むことが重要であると考えた。

そこで本研究は、本学学生の地域への食育支援に対する認知や活動への参加意思、知識・スキルなどの調査により保育学生の食育支援活動に関する意識・実態を把握する。さらに、本学で今年度実施した親子を対象とした食育支援活動に関わった学生の気づきの分析を通して、保育学生の食育支援力を育むための視座を得ることを目的とする。

2. 地域食育活動への保育学生の意識についての調査

2-1. 方法

本学子ども学科 1 年生 152 名を対象に 2012 年 7 月に質問紙調査を行った。調査は授業時間内に配布し、調査主旨を説明後、記入させて即時回収で行った。調査内容は、地域食育活動についての意識 3 項目（認知と重要性、参加意思）、食育意識 2 項目（認知と関心度）、食育支援のための態度 4 項目、知識・スキル 6 項目について 2～5 の選択肢から回答させた。調査項目ごとに度数を求め、地域食育活動への参加意思（以下、食育参加意思）への回答より、「大いに思う群（以下、積極群） $n=34$ 」、「少し思う群（以下、普通群） $n=77$ 」、「どちらともいえない又は思わない群（以下、消極群） $n=41$ 」の 3 群別に各変数とクロス集計を行った。群間差の検定は Kruskal-Wallis 検定を用いた。

2-2. 結果および考察

対象は年齢 18.54 歳、男性は 11 名（7.2%）、女性は 141 名（92.8%）であった。結果を表 1 に示した。

保育学生の食育への関心は高いが、地域で行われている食育活動を認知している者は 20%弱と低く、活動は周知されていなかった。その中でも食育参加意思により有意差があり、積極群は食育への関心も高く、地域での食育活動の周知、重要性を認識していた。

また、食育支援のための態度として、「親子に食への関心を高めてもらいたいか」についてそう思うものは積極群から 76.5%、50.6%、29.3%の順であり、有意な群間差が認められた ($p<0.001$)。他の項目においても同様に有意な差が認められ、食育参加意思の積極群は、他の群に比べ、食育支援に対して肯定的な態度をもつものが多いことが明らかになった。また、知識とスキルにおいては、栄養の概要についての知識とスキルが「充分ある」、「まあまあある」と回答した者を合わせると積極群から順に 44.1%、15.6%、12.2%であり、有意な群間差が認められた ($p<0.001$)。食文化についての知識とスキルがある、栄養バランスのよい食事についての知識とスキルがある、についても積極群があると思うものが多く、有意な群間差 ($p=0.021$ 、 $p=0.044$) がみられた。また、食物栽培についての知識とスキルがある、については群間に有意差はなかったものの差がある傾向がみられた ($p=0.069$)。

以上より、保育学生は幼稚園や保育園などの保育の現場以外の機関（地域）で行われている食育支援活動が認知されていないことが明らかになった。そのため、そのような活動の重要性と実施現状などを伝えていく必要があると考えられる。また、地域の食育支援活動への積極的な参加を促すには、食育

表1 地域の食育活動参加への参加意思と意識・態度などの関連

項 目			全体 n=152	地域の食育活動参加への参加意思			
				積極群 n=34	普通群 n=77	消極群 n=41	P 値
食育意識	食育の認知	言葉も意味も知っている	32(21.2)	12(35.3)	15(19.7)	5(12.2)	0.101
		言葉は知っているが意味は知らない	112(74.2)	22(64.7)	57(75.0)	33(80.5)	
		言葉も意味も知らない	7(4.6)	0(0.0)	4(5.3)	3(7.3)	
	食育の関心度	関心がある	55(36.2)	25(73.5)	26(33.8)	4(9.8)	<0.001
		どちらかといえば関心がある	87(57.2)	8(23.5)	47(61.0)	32(78.0)	
どちらかといえば関心がない		7(4.6)	0(0.0)	3(3.9)	4(9.8)		
	関心がない	1(0.7)	0(0.0)	1(1.3)	0(0.0)		
	わからない	2(1.3)	1(3.0)	0(0.0)	1(2.4)		
地域の食育活動	食育活動の認知	知っている	29(19.1)	13(38.2)	14(18.2)	2(4.9)	0.001
		知らない	123(80.9)	21(61.8)	63(81.8)	39(95.1)	
	食育活動の重要性の認知	重要だと思う	131(86.2)	33(97.1)	72(93.5)	26(63.4)	<0.001
	どちらともいえない	20(13.2)	1(2.9)	5(6.5)	14(34.1)		
	重要だと思わない	1(0.6)	0(0.0)	0(0.0)	1(2.5)		
食育支援のための態度	信頼される保育者になりたい	強くそう思う	134(88.2)	31(91.2)	74(96.1)	29(70.7)	0.001
		少しそう思う	16(10.5)	3(8.8)	3(3.9)	10(24.4)	
		どちらともいえない	2(1.3)	0(0.0)	0(0.0)	2(4.9)	
		あまりそう思わない	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	
		全くそう思わない	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	
	親子に食への関心を高めてもらいたい	強くそう思う	77(50.7)	26(76.5)	39(50.6)	12(29.3)	<0.001
		少しそう思う	70(46.1)	8(23.5)	37(48.1)	25(61.0)	
		どちらともいえない	5(3.3)	0(0.0)	1(1.3)	4(9.8)	
		あまりそう思わない	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	
		全くそう思わない	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	
	親子と一緒に食生活の問題を考えたい	強くそう思う	58(38.4)	23(67.6)	27(35.1)	8(20.0)	<0.001
		少しそう思う	82(54.3)	11(32.4)	48(62.3)	23(57.5)	
		どちらともいえない	11(7.3)	0(0.0)	2(2.6)	9(22.5)	
		あまりそう思わない	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	
		全くそう思わない	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	
	親子の食生活改善への助言をしたい	強くそう思う	77(50.6)	25(73.5)	38(49.4)	14(34.1)	0.024
少しそう思う		58(38.2)	6(17.6)	32(41.6)	20(48.8)		
どちらともいえない		16(10.5)	3(8.8)	7(9.1)	6(14.6)		
あまりそう思わない		1(0.7)	0(0.0)	0(0.0)	1(2.4)		
全くそう思わない		0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)		
食育支援のための知識・スキル	栄養素の概要についての知識とスキル	充分ある	3(2.0)	1(2.9)	1(1.3)	1(2.4)	0.001
		まあまあある	29(19.1)	14(41.2)	11(14.3)	4(9.8)	
		あまりない	110(72.4)	18(52.9)	61(79.2)	31(75.6)	
		全くない	10(6.5)	1(2.9)	4(5.2)	5(12.2)	
	食品の安全・安心についての知識とスキル	充分ある	1(0.7)	1(2.9)	0(0.0)	0(0.0)	0.407
		まあまあある	51(33.6)	14(41.2)	23(29.9)	14(34.1)	
		あまりない	96(63.2)	19(55.9)	51(66.2)	26(63.4)	
		全くない	4(2.6)	0(0.0)	3(3.9)	1(2.4)	
	食文化についての知識とスキル	充分ある	1(0.7)	1(2.9)	0(0.0)	0(0.0)	0.021
		まあまあある	33(21.7)	13(38.2)	14(18.2)	6(14.6)	
		あまりない	107(70.4)	18(52.9)	58(75.3)	31(75.6)	
		全くない	11(7.2)	2(5.9)	5(6.5)	4(9.8)	
	食物栽培についての知識とスキル	充分ある	1(0.7)	1(0.7)	0(0.0)	0(0.0)	0.069
		まあまあある	32(21.1)	10(29.4)	17(22.1)	5(12.2)	
あまりない		108(71.1)	21(61.8)	56(72.7)	31(75.6)		
全くない		11(7.2)	2(5.9)	4(5.2)	5(12.2)		
栄養バランスのよい食事についての知識とスキル	充分ある	2(1.3)	2(5.9)	0(0.0)	0(0.0)	0.044	
	まあまあある	45(29.6)	13(38.2)	23(29.9)	9(22.0)		
	あまりない	97(63.8)	19(55.9)	49(63.6)	29(70.7)		
	全くない	8(5.3)	0(0.0)	5(6.5)	3(7.3)		
食育教材・資料を作成する知識とスキル	充分ある	1(0.7)	1(0.7)	0(0.0)	0(0.0)	0.843	
	まあまあある	15(9.9)	7(20.6)	6(7.8)	2(4.9)		
	あまりない	117(77.0)	21(61.8)	61(79.2)	35(85.4)		
	全くない	19(12.5)	5(14.7)	10(13.0)	4(9.8)		

に対する関心を高め、栄養や食、食育に関する知識やスキルをつけること、さらに支援のための視点として子どもだけでなく、親や親子、それぞれとの関わりが複合的にもてることが必要といえる。前報¹¹において、保育学生に食の知識や食意識向上のための教育プログラムには周辺分野と関連させ、社会環

境を捉え、実践的な取り組みを必要と報告したが、それに加え親子との関係構築力やコミュニケーション力などの育成も重要な課題と考えられる。

3. 食育親子活動の概要

保育学生の親子を対象とした食育支援力を育む活動として、本学では子ども学科主催の地域貢献プロジェクトである「親子でやさい天国」*を、地域の親子 24 組を対象として企画した。本学敷地内にある畑で、「夏野菜・サツマイモの栽培活動」や、自然を活かした「あそびひろば」を行った。子どもの参加対象年齢は 4 歳児から小学 2 年生までとした。保育学生は 24 名（1 年生 12 名・2 年生 12 名）が参加し、地域の農業指導員 2 名と、本学教員 8 名と共に、企画運営を行った。実施詳細は次の通りである。

3-1. 第 1 回企画「夏野菜とサツマイモの苗植え&あそびひろば」

平成 24 年 5 月 20 日（日）午前 10～12 時に実施した。参加親子数は 21 組、参加保育学生数は 18 名であった。活動のねらいは、夏野菜とサツマイモの栽培を通して、親子が意欲をもって食に関わる経験をして植物の生長や食への期待を高めるように、保育学生が支援できることである。活動内容は、各親子専用プランター 2 個に土を入れ、トマト・ピーマン・キュウリ・ナスの苗を 1 本ずつ植え、支柱を立てた。親が、サツマイモを植える共有畑の畝作りを行っている間に、子どもと保育学生がプランターに立てる名札を作成し、その後「あそびひろば」として保育学生が作成した学内マップをもとに学内散策を行った。最後に、親子と保育学生で、共同畑にサツマイモの苗を植えた。

3-2. 第 2 回企画「My かかしを作ろう」

平成 24 年 7 月 8 日（日）午前 10～12 時に実施した。参加親子数は 15 組、参加保育学生数は 21 名であった。活動のねらいは、植物が育つ過程でかかしの果たす役割を親子に伝えて一緒に制作する楽しさを味わえるように、保育学生が支援できることである。活動内容は、食と文化の関連から、かかし作りを行った。まず子どもにかかしとは何か、どんな役割を果たしているのかを知らせるために、保育学生が人形劇「1 本足のかかし」を上演し、子どもたちと一緒にかかしの歌を歌った。次に、参加親子は 6 つのグループに分かれて、親子で「My かかし作り」を行った。保育学生も 2 人組になり各グループに入り、かかしの役割を考慮した制作支援などを行いながら親子と関わって制作を行った。その後、完成したかかしを展示し、かかしコンテストを実施した。お気に入りのかかしに親子が投票をし、その結果発表を行った。最後に夏野菜を収穫して、親子に参加賞（My かかしと親子の記念写真）を贈った。

3-3. 第 3 回企画「おいもパーティー&あそびひろば」

平成 24 年 11 月 25 日（日）午前 10～12 時に実施した。参加親子数は 19 組、参加保育学生数は 20 名であった。活動のねらいは、親子が自分たちで育てたサツマイモと一緒に食べて楽しむことや、サツマイモのツルを用いてリースを制作する楽しさを味わえるように、保育学生が支援できることである。活動内容は、5 月に植えたサツマイモを収穫し、焼イモにして食した。「あそびひろば」では、引いたサツマイモのツルを使用して、リースを親子で作った。

4. 食育支援活動に関わる保育学生の学びに関する調査方法

4-1. 活動振り返りアンケート調査

毎回、活動後に活動全体および子どもへの関わり、親への関わり、親子への活動支援についての自己評価を4選択肢により回答させた。また、具体的な活動を自由に記述させた。参加人数、回収率は4-2.と同じである。

4-2. KJ法分析

第1～3回の「親子でやさしい天国」の活動後に、保育学生に対して質問紙を配布し、自由記述後、質問紙を回収した。回答をKJ法分析¹³⁾を用いて、保育学生の学びを浮き彫りにした。回収率は次の通りである。第1回参加保育学生数18人、回収質問紙16枚、回収率88%。第2回参加保育学生数21人、回収質問紙21枚、回収率100%。第3回参加保育学生数20人、回収質問紙20枚、回収率100%。調査内容は、学年・性別を調査し、第1～3回までの各活動について、それぞれ以下の3つの質問項目の回答を求めた。

- ①「栽培・制作活動（苗植え・収穫・かかし作り・リース作り）で印象に残ったことを書きましょう」
- ②「子どもとの関わりで印象に残ったことを書きましょう」
- ③「親との関わりで印象に残ったことを書きましょう」である。

5. 食育支援活動に関わる保育学生の学びに関する調査結果

5-1. アンケート結果

結果は表2に示した。全体の活動の評価は「よかった（大変よかったとよかったの計）」が第1回87.5%、第2回90.4%、第3回は100%と回を追うごとに高くなり、よい評価をしていた。子ども、親への関わりでは「関わられた」とするものが第1回37.5%、25.0%より第2回57.1%、47.6%の方が高い値になった。しかし、第3回は「関わられた」とする保育学生が28.6%、23.8%と低くなった。親子への活動支援については差が見受けられなかった。これは第1回と第2回では主体の活動が栽培と造形と異なったことが一因と考えられる。また、第2回は自由記述にも具体的な支援活動の記載がみられ、グループでの活動分担が明白になり、保育学生自身が活動しやすかったことなども要因と考えられる。第3回は保育学生の直接的な関わりがなくても、活動内容すべてが親子だけで活動できるものであった。活動内容や展開、環境設定などにより可能となったと思われる。

表2 食育支援活動後の振り返りアンケート (%)

	子関わり			親関わり			親子支援		
	1回	2回	3回	1回	2回	3回	1回	2回	3回
未記入	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.8	9.5
関わられた	37.5	57.1	28.6	25.0	47.6	23.8	37.5	28.6	19.0
まあ関わられた	50.0	28.6	23.8	62.5	28.6	23.8	43.8	42.9	42.9
あまり関われなかった	12.5	14.3	42.9	12.5	23.8	42.9	12.5	19.0	19.0
関われなかった	0.0	0.0	4.8	0.0	0.0	9.5	6.3	4.8	9.5

5-2. KJ法分析結果

KJ法分析では、各企画・質問別に回答を分析した。1つの質問に対して、2つ以上の項目内容が含まれている場合は、項目を分けて分析を行った。

①「栽培・制作活動で印象に残ったこと」のKJ法より

第1回目の活動では、KJ法より、16回答16項目が抽出され、7カテゴリーに分けられた。

上位のカテゴリーでは、第1に「親子で栽培活動」(3項目)として、「親子で協力」「親子共に有意義な時間」「親子の絆」が挙げられた。それに反して、第2に「親だけで栽培活動」(3項目)があり、「親が一生懸命」「子どもが栽培活動に不参加」が挙げられた。「子どもの様子」(3項目)として、「楽しむ」「新鮮な気持ち」「土や虫に触れる喜び」が挙げられた。「保育学生の知識不足」(3項目)として、「栽培の仕方がわからない」「逆に親子に教えてもらった」「もっと勉強したい」が挙げられた。下位のカテゴリーでは、「子どもや農業指導員との交流」(2項目)として、「野菜当てゲームをした」「心が通じ合う」が挙げられた。また、「支援の仕方」(1項目)として、「親子で活動できるようなつなぎ役をしたい」が挙げられた。「農業指導員との連携」(1項目)としては、「打ち合わせ準備不足」が挙げられた。

第2回目の活動では、KJ法より、21回答24項目が抽出され、11カテゴリーに分けられた。

上位のカテゴリーでは、「親だけでかかし作り」(7項目)として、「親の方が熱心」「共同作業がみられない」「子どもは興味をもっていなかった」が挙げられた。下位のカテゴリーでは、「かかしの表現」(2項目)として、「自分なりの表現が表出」「多様なデザインがある」が挙げられた。「保育学生と子どもとの関わり」(2項目)として、「子どもと一緒に制作した」「褒めて喜んでいた」が挙げられた。「支援の仕方」(2項目)として、「子どもに興味をもたせる環境作りが必要」「子どもの自由な発想を支援する」が挙げられた。「親子同士の関わり」(2項目)として、「家族同士の触れ合いが見られた」「親同士の触れ合いの広げ方を考えたい」が挙げられた。「事前準備(かかしの骨組み作り)」(2項目)として、「子どもの作り易さを考えた」「危険性をなくす」が挙げられた。「子どもと野菜収穫」(2項目)として、「野菜の成長に驚く子どもの姿」「大きくなった野菜を子どもと一緒に収穫する楽しさ」が挙げられた。「保育学生と野菜収穫」(2項目)として、「野菜の成長に感動」が挙げられた。上位カテゴリーの「親だけでかかし作り」とは逆に、「親子で制作」(1項目)として、「一緒に楽しそうにかかし作り」が挙げられた。「コンテスト」(1項目)として、「順位がついて泣く子ども」が挙げられた。「保育学生の知識不足」(1項目)として、「親に教えられるようになりたい」が挙げられた。

第3回目の活動では、KJ法より、20回答29項目が抽出され、11カテゴリーに分けられた。

上位のカテゴリーでは、第1に「収穫・焼イモを食べる親子の姿」(6項目)として、「最後まで夢中でイモを収穫する子ども」「大きなイモを収穫できて嬉しそうな子ども」「おいしいといって食べる親子の姿が嬉しかった」が挙げられた。第2に「焼イモの味」(4項目)として、「電子レンジの調理とは違うおいしさがある」「見た目から違う」「焼きムラや焦げは本物の証」が挙げられた。また、「自分たちで育てた達成感」(4項目)として、「収穫できたことに感動」「格別のおいしさがある」「よい経験になった」が挙げられた。第3に「サツマイモの大きさ」(3項目)として、「予想以上に大きいイモが収穫できた」が挙げられた。また、「焼き方」(3項目)として、「火の通りにばらつきが出た」「火力の調整が難しかった」「もう少し炭で焼いた後に落ち葉を入れるべきだった」が挙げられた。下位のカテゴリーでは、「サツマイモ収穫からリース作り」(3項目)として、「サツマイモのツルでリースを作れることを知った」「今後活かしたい」が挙げられた。「イモ掘りで幼虫見つけ」(2項目)として、「幼虫など様々

な発見があった」が挙げられた。「協力」(1項目)として、「みんなで協力したのでおいしく感じた」が挙げられた。「親子の共同作業」(1項目)として、「親子の共同作業の姿をみて温かい気持ちになった」が挙げられた。「イモ掘りの親の取り組み」(1項目)として、「家庭によって親が一生懸命イモを掘る家もあれば子どもに任せて見守る家もあることに気づいた」が挙げられた。「イモ掘りの支援」(1項目)として、「農業指導員の方が土を掘って子どもにイモを手渡す場面があったが子どもたちで掘れる支援が必要」が挙げられた。

②「子どもとの関わりで印象に残ったこと」のKJ法より

第1回目の活動では、KJ法より、16回答18項目が抽出され、5カテゴリーに分けられた。

上位のカテゴリーでは、第1に「子どもの自然への興味関心」(9項目)として、「子どもの探究心・好奇心に触れた」「子どもの意欲が高い」「土や虫に触れて楽しむ姿」が挙げられた。第2に「保育学生と子どもとの関わり」(3項目)として、「子どもと距離があった」「信頼を得る」が挙げられた。「子どもと野菜栽培」(3項目)として、「五感を駆使して楽しむ子ども」「苗についての質問をする」「幼稚園での栽培経験を話す」が挙げられた。下位のカテゴリーでは、「言葉表現」(2項目)として、「葉っぱの擬態語遊び」「自然遊びから言葉習得へ」が挙げられた。また、「子どもと親との関わり」(1項目)として、「子どもは親の姿をよくみている」が挙げられた。

第2回目の活動では、KJ法より、21回答25項目が抽出され、7カテゴリーに分けられた。

上位のカテゴリーでは、第1に「保育学生と子どもとの関わり」(7項目)として、「保育学生のまねをする」「材料の選別」「擬態語を使って一緒に遊ぶ」「片付けまで一緒にする」「子どもとの会話」が挙げられた。第2に「自然や材料への子どもの興味関心」(6項目)として、「子どもの好奇心に触れた」「材料に対する興味からかかし作り参加へ」「材料を使ったモノ遊びへの広がり」が挙げられた。第3に「支援の仕方」(5項目)として、「抱っここの仕方を知りたい」「子どもの興味を引く方法を知りたい」「子どもの目線に立つ」「活動を推進する方法を知りたい」「人見知りの子どもの言葉で表現しない子どもとの関わり方を知りたい」が挙げられた。第4に「子どもがかかし作りに不参加」(3項目)として、「親と一緒にできずに退屈」「興味なし」「材料に興味を示す」が挙げられた。下位のカテゴリーでは、「コンテスト」(2項目)として、「賞にもれて悔しそうな子どもの姿」「賞の必要性の検討」が挙げられた。「安全面の配慮」(1項目)として、「常に目を配る」が挙げられた。また、「野菜の収穫」(1項目)として、「野菜がたくさん収穫できて嬉しそうだった」が挙げられた。

第3回目の活動では、KJ法より、20回答24項目が抽出され、7カテゴリーに分けられた。

上位のカテゴリーでは、第1に「子どもの自然への興味関心」(9項目)として、「ドングリ拾いに夢中」「幼虫みつけに夢中」「焼イモの煙を嬉しそうにみる」「竹の棒でチャンバラ」が挙げられた。第2に「保育学生と子どもとの関わり」(6項目)として、「子どもから積極的に声をかけてくる」「落ち葉拾いの手伝いをしてくれる」「手をつなぐ」「一緒にドングリ拾い」「教育実習を経て子どもと関われるようになった」が挙げられた。第3に「イモ掘りに夢中」(3項目)として、「サツマイモを興味津々で掘る」が挙げられた。また、「リース作りを工夫」(3項目)として、「自分の力で飾り付けをする」「子どもの発想の豊かさを感じた」が挙げられた。下位のカテゴリーでは、「子どもの自然への興味関心」と

関わって、「幼虫の提示の仕方」(1項目)として、「虫が苦手な子どもへの提示の仕方を考える」が挙げられた。「活動への誘いかけ」(1項目)として、「リース作りに誘う声かけの必要性」が挙げられた。「子どもに合った活動の提案」(1項目)として、「運動遊びなどの活動設定の必要性」が挙げられた。

③「親との関わりで印象に残ったこと」のKJ法より

第1回目の活動では、KJ法より、16回答17項目が抽出され、7カテゴリーに分けられた。

上位のカテゴリーでは、第1に「親子で栽培活動」(4項目)として、「親の思いと親子の絆を感じた」「子どもと栽培の楽しみを共感する親の姿」「子どもの声をよく聴く親」「子どもと同じ目線に立つ親」が挙げられた。「親子の関係」(4項目)として、「子どもの姿を絶えず意識する親」「子どもへの声かけ」「子どもを甘やかさない親」が挙げられた。第2に「保育学生と親との関わり」(3項目)として、「子どもを通じた会話」が挙げられた。下位のカテゴリーでは、「保育学生と親との関わり不足」(2項目)として、「積極的に関わりたい」「関わり方がわからない」が挙げられた。「親の栽培活動の取り組み」(2項目)として、「子どものために畝作り」「みているだけの親」が挙げられた。「家族同士の関わり」(1項目)として、「夫婦で参加の家族は交流が少ない」が挙げられた。「説明の仕方」(1項目)として、「分かりやすい説明の仕方を工夫したい」が挙げられた。

第2回目の活動では、KJ法より、21回答24項目が抽出され、8カテゴリーに分けられた。

上位のカテゴリーでは、第1に「活動を通じた子どもの話」(7項目)として、「子どもと関わるきっかけを作ってくれた」「子どもの好みについて話をした」「嫌いな野菜を克服した子どもの話を聞いた」「元気がなかった子どもが今日は元気であるという話を聞いた」「子どもについての親の悩みを話してくれた」が挙げられた。第2に「保育学生と親が協力して制作」(6項目)として、「親と共に考えた」「アイデアを聞いてくれた」「アイデアを出し合った」「子どもの自由な発想を活かすために材料と一緒に加工した」が挙げられた。第3に「親との関わり方」(4項目)として、「わからない」「どう参加していいのか迷った」「会話ができなかった」が挙げられた。第4に、「親だけでかかし作り」(3項目)として、「親が一生懸命」が挙げられた。下位のカテゴリーでは、「アイデアに感心」(1項目)として、「親の個性的なアイデアに感心した」が挙げられた。「感謝」(1項目)として、「子どもとの関わりを感謝された」が挙げられた。「子どもと野菜収穫」(1項目)として、「子どもと一緒に協力して野菜収穫をした」が挙げられた。「家庭教育」(1項目)として、「命の大切さについて教える親がいた」が挙げられた。

第3回目の活動では、KJ法より、20回答21項目が抽出され、9カテゴリーに分けられた。

上位のカテゴリーでは、第1に「子どもの支援をする親」(6項目)として、「掘るイモを子どものために残す親」「子どもがリース作りを楽しめるように家で材料準備」「リース作りの提案はするが活動は子どもにさせる」「リースの形だけを作って子どもが飾りつけ」が挙げられた。第2には、第1とは逆に、「親だけが活動」(4項目)として、「子どもよりイモ堀りに夢中」「子どもよりリース作りに真剣」が挙げられた。第3に「保育学生が野菜や虫について親に教わる」(3項目)として、「野菜のことを教えてもらった」「幼虫の名前を教えてもらった」が挙げられた。下位のカテゴリーでは、「リース作りのアドバイスをする」(2項目)として、「ツルの巻き方を伝えた」「飾りのつけ方を伝えた」が挙げられた。「父親が力作業に積極的」(2項目)として、「プランターの片付けを手伝ってくれて助かった」が挙げら

れた。「親子の関わりをつくる」(1項目)として、「質問されたことについては教えて親子でできることは見守った」が挙げられた。「1回目からの関わりの変容」(1項目)として、「保護者と気軽に声をかけ合うことができるようになった」が挙げられた。「つながりの大切さ」(1項目)として、「実習園での親子がいて声をかけてくれた」が挙げられた。「関わりが少ない」(1項目)として、「進行に一生懸命であり関われなかった」が挙げられた。

6. 考察

6-1. 親子が夢中になる内容設定の必要性

～アンケート結果及びKJ法「栽培・制作活動で印象に残ったこと」より～

第1回の上位のCATEGORYに、「親子で栽培活動」が挙げられている。これから育てる野菜に収穫の期待を込めて、親子が一緒に取り組んだことが伺える。しかし反対に、第1・2回の上位のCATEGORYに、「親だけで栽培活動」「親だけでかかし作り」が挙げられている。第1回では、「子どもの様子」の中に、栽培活動よりも、土や虫との触れ合いを楽しむ子どもの姿がみられ、第2回では、「支援の仕方」の中に、子どもの興味関心に合わせた環境づくりの必要性が示唆されている。特に第2回では、子どものかかし作りに取り組む姿はあまりみられず、綿・紐などを触って材料に興味関心を示した。子どもにとって、かかしという存在は身近ではなく、かかしの働きについても理解が難しかったのではないと思われる。そのため、かかし完成を目指して課題として取り組む親とは異なり、子どもはかかし完成を目指すことには楽しさを感じておらず、その過程で触れ合う自然物や材料などのモノに興味関心をもっていたことがわかる。第2回のアンケート結果からは、「子どもへの関わり」「親への関わり」が共に高い数値を示しているが、保育学生は、材料に興味関心を示す子どもに関わる一方、かかし完成を目指す親の活動に援助を行うなどの関わりをもったことがわかる。しかし、かかし作りを通して、子どもと親をつなぐための「親子支援」を行うまでには至らなかったことが伺える。第3回では、上位のCATEGORYに「収穫・焼イモを食べる親子の姿」が挙がり、親子どもが共に収穫・試食を楽しんだことが伺える。アンケート結果からは、第3回は、子どもや親に「関わられた」という保育学生が少なく、「関われなかった」とする保育学生が増えている。これは、イモを収穫し、それを食すという活動内容が子どもにとっても親にとっても魅力的であったと思われる。そうした活動内容の魅力が、保育学生が直接関わってつながなくても、親子を自然につないだと考えられる。また、第3回で行ったリース作りは、かかし作りとは違い、掘ったイモのツルを使用していることと、昨今リースは家庭でもよく飾られており子どももよく知っていたことから、親子での制作を可能にしたと考えられる。このように、親にも子どもにも、魅力的な活動内容を設定することができれば、保育学生が第2回活動のように直接的に関わることも少なくても、親子が自然とつながっていくことができると考えられる。

以上のことより、親と子どもをつなぐために、親子が共に興味関心をもって取り組める活動内容を設定する必要があると考えられる。興味関心もてる内容とは、親にも子どもにも内容が身近なものであり、内容の意味が理解できることが大切である。さらに、何かを完成させる・作り上げるといった目指すべき方向がはっきりしている内容ではなく、活動過程で、子どもが様々な感じ方を広げたり味わった

りすることができる多様性や自由性のある内容が望ましい。大人の思考としては、完成というゴールが明確な活動は、やるべき課題がはっきりして取り組み易さがあると思われる。しかし、完成という全員が同じゴールを目指す内容では、その過程で子どもの多様な表現が現れにくく、子どもの夢中が継続しにくいと考えられる。よって、活動内容設定には、活動過程を大切にするゴールフリーの視点が必要であると考えられる。第1回の上位のcategorieに「保育学生の知識不足」が挙げられているが、設定する活動内容に関する保育学生の知識理解は、大変重要であり、欠かすことのできないものであると考えられる。

6-2. 保育学生が活動内容の楽しさに一緒に浸る

～アンケート結果及びKJ法「子どもとの関わりで印象に残ったこと」より～

第1回の上位のcategorieに、土や虫に対する「子どもの自然への興味関心」が挙がり、保育学生は子どもの感性の豊かさを客観的に捉えている。しかし、「保育学生と子どもとの関わり」からわかるように、自然への興味関心を示す子どもを客観的にみているだけで、なかなか子どもと関わりがもてない保育学生の姿もみられた。第2回では、上位のcategorieで「保育学生の子どもの関わり」が挙がり、かかし作りに興味関心を示さない子どもが、材料の感触などには興味関心があることを保育学生が捉え、材料を提示して一緒に遊ぶことから、何とか活動に子どもを参加させようとする保育学生の関わりがみられた。これは、アンケート結果からの「子どもへの関わり」でも、2回目は「関わられた」の数値が高くなっている。第3回では、上位のcategorieに、ドングリ拾いや幼虫みつけなど、イモ掘りだけではなく、広く自然に関心を示す「子どもの自然への興味関心」が挙げられた。また、「保育学生と子どもとの関わり」も上位のcategorieに挙がり、イモ掘りやリース作りの時は親子での活動が多く、なかなか関われなかった保育学生も、子どもと一緒にドングリ拾いや落ち葉集めなどの活動を行うことで関わりをもてたことが伺える。

以上のことより、活動内容の楽しさに、保育学生と一緒に浸り、一緒に遊ぶことによって、子どもと保育学生がつながれたことがわかる。つまり、活動内容の魅力を中心として、保育学生と子ども、もしくは保育学生と親がつながることが可能であり、そのためには保育学生が、まずは自らが夢中になって取り組み、体験を通して活動内容の魅力や楽しさに触れることが大切であると考えられる。

6-3. 関係づくりのためのグループ形態を工夫する

～アンケート結果及びKJ法「親との関わりで印象に残ったこと」より～

第1回の上位のcategorieで、子どもを通して会話ができた「保育学生と親との関わり」3項目が挙げられている。第2回では、活動を通して子どもの話で親と言葉を交わすことができたという「活動を通じた子どもの話」7項目や「保育学生と親が協力して制作」6項目が上位のcategorieに挙がっており、保育学生と親との関わりは明らかに第2回の方が多くなっている。これはアンケート結果にも表れており、「親への関わり」で「関わられた」が、第1回は25.0%であったのに対し、第2回は47.6%に上昇している。第1回と第2回の違いとして、第2回では、親子を6つのグループに分け、そこに保育学生も一緒に入って制作するというグループ形態の工夫を行った。グループに分けて、関係を限定することによって、保育学生・親・子どもの関係がとり易くなることと、親子同士の関係が生まれることをねらっ

た。結果、親子同士の関係づくりや保育学生・親・子どもの三者の関係づくりまでは難しかったが、活動内容を介した保育学生と親、もしくは保育学生と子どものつながりは生まれたと思われる。保育学生が親・子どもそれぞれと関わりをもつことは、親子の関わりをつくるための大切な前段階であり、そこから親子をつなげる支援へと移行していくことも可能であると考えられる。グループ分けで、関係を限定して向き合わざるを得ない状況をつくることによって、第2回の上位の 카테고리にも表れているように、逆に「親との関わり方がわからない」という保育学生も出てきた。これは、アンケート結果の「親への関わり」で「あまり関われなかった」の数値が、第1回よりも多くなっていることでも示されている。保育学生にとって、親と関わりをもつことで初めて自分自身の課題に気付けたのではないかと考えられる。

以上のことより、グループ形態の工夫を行うことは、誰と関わるのかという対象が明確化し、活動内容を介した関係づくりが行い易くなると考えられる。その中で、まずは保育学生が親、子どもそれぞれとの関わりをつくることによって、間接的に親子の関係づくりへとつなげることができ、支援に関する自分自身の課題にも気付くことができると考えられる。

7. おわりに

本研究は、本学学生の地域への食育支援に対する認知や活動への参加意思、知識・スキルなどの調査により保育学生の食育支援活動に関する意識・実態を把握すると共に、本学実施の親子を対象とした食育支援活動に関わった学生の気づきの分析を通して、保育学生の食育支援力を育むための視座を得ることを目的としてきた。

地域への食育支援活動に対する参加意思の調査結果としては、地域親子食育活動の重要性と実施現状を周知させることが大切であり、活動への積極的参加には食の知識や食育意識向上だけでなく、実践的な取り組みや親子との関係構築力やコミュニケーション力などの養成教育支援が必要であることが明らかになった。

そうした保育学生の食育支援活動に対する意識が確立していない現状下で、親子を対象とした食育支援活動を企画し、参加した保育学生の気づきから、次の視座を得た。まず、活動内容は、親子をつなぐために親と子どもの両方が夢中になることができ、多様性や自由性のあるものが望ましく、内容設定にはゴールフリーの視点が必要であることが明らかになった。次に、保育学生と子ども、もしくは保育学生と親がつながるために、保育学生自らが夢中になって取り組み、活動内容の魅力や楽しさに触れることが大切であることが明らかになった。最後に、活動内容を介した保育学生・親・子どもの関係づくりを行い易くするために、活動のグループ形態を工夫する必要があることが明らかになった。

今後の課題としては、本研究で得た視座をもとに、保育者養成校として親子支援の場を設定し、保育学生の継続的な参加を促す中で、保育学生が保育者として必要な親子支援の視点に気付くことができるような教育支援を行っていくことである。

註・参考文献

1. 厚生労働省 (2008) 「序章」『保育所保育指針解説書』フレーベル館 pp.8-13
2. 文部科学省 (2008) 「序章」『幼稚園教育要領解説』フレーベル館 pp.2-19
3. 厚生労働省 (2008) 「序章」『保育所保育指針解説書』フレーベル館 pp.11-12
4. 文部科学省 (2008) 「序章」『幼稚園教育要領解説』フレーベル館 p.4
5. 布施仁・佐野豊 (2012) 「『食育』に関する実践授業報告～野菜作りの必要性～」『全国保育士養成協議会第51回研究大会研究発表論文集』全国保育士養成協議会 pp.392-393
6. 川瀬弘樹・大澤愛・森下幾子・吉岡眞知子 (2012) 「子育て支援活動における食の関心を高める試み」『全国保育士養成協議会第51回研究大会研究発表論文集』全国保育士養成協議会 pp.158-159
7. 吉川寿美・佐々木美智子・森田真紀子 (2012) 「学生の保護者支援力向上のための授業実践について」『全国保育士養成協議会第51回研究大会研究発表論文集』全国保育士養成協議会 pp.486-487
8. 萩尾ミドリ・池田可奈子・椎山克己 (2011) 「保育者養成校における子育て支援活動の実際と学生への教育的効果」『久留米信愛女学院短期大学研究紀要第34号』久留米信愛女学院短期大学 pp.117-124
9. 池村進 (2011) 「学生とともにつくるサツマイモ栽培について－高田短期大学内の栽培園を活用して－」『高田短期大学育児文化研究第6号』高田短期大学育児文化研究センター pp.29-38
10. 池村進 (2012) 「地域の親子と楽しむ野菜栽培・食育活動－『親子でやさしい天国』の活動を通して－」『高田短期大学育児文化研究第7号』高田短期大学育児文化研究センター pp.67-77
11. 鷺見裕子 (2012) 「保育者養成短大生の食育実践力育成のための基礎的検討－入学時の食育に関する意識と食生活実態の関連－」『高田短期大学育児文化研究第7号』高田短期大学育児文化研究センター pp.29-38
12. 川喜田二郎 (1967) 『発想法』中公新書

*本研究において対象となった食育親子活動は、高田短期大学子ども学科主催の地域貢献プロジェクトとして、著者と6名の学科教員（山崎征子、三宅啓子、福西朋子、山本敦子、小菅千恵子、寶來敬章）の企画・運営・保育学生指導のもとに実施した。また、「子どもゆめ基金」（独立行政法人国立青少年教育振興機構）より、一部補助金を受けて運営を行った。